編集者の独り言

「化学と工業」の編集会議が開催される日本化学会（化学会館）は，JR 御茶ノ水駅近くにあります。聖橋（ひじりばし）口を出て右に歩くと，塩基性炭酸銅を主成分とする美しい緑青（ろくしょう）をまとったドーム屋根の通称ニコライ堂（重要文化財）が見えてきます。駿河台三丁目交差点を右に折れ，坂の上を目指して進むと，川端康成，松本清張など錚々たる文化人が数多く宿泊した歴史的建造物，山の上ホテル（休館中）が見えてきます。その途中，左に日本初の室内楽専用ホールである素敵な外壁のカザルスホール（改装中）が見えます。ここには 1931 年宮沢賢治が上京した際に病気で倒れ逗留した八幡館がありました。賢治は酸性に傾く火山国日本の土壌中和改良のため，また壁材料として石灰岩（炭酸カルシウム）を売り込みに来ていたとのこと。亡くなる 2 年前のことでした。さて，坂を上りきって山の上ホテルに到着するとその先に化学会館があります。古地図（安政 3 年，1856 年）によれば，堀田山城守の屋敷があったようです。

化学会館の東側にある明治大学博物館では，NHK 連続テレビ小説（朝ドラ）「虎に翼」（2024 年）の主人公となった日本初の女性弁護士・判事・裁判所所長，三淵嘉子さんが化学会館のすぐ西にある男坂付近にあった明治大学専門部女子部で学んでいたと紹介がありました。この急な石段を下りると猿楽通りに出ます。歩を進めると，千代田区立お茶の水小学校が現れます。ここは元々夏目漱石が通った錦華小学校で，「吾輩は猫である」という石碑があります。どうやって子供時代の漱石が早稲田の喜久井町からここまで通ったのだろうと不思議に思います。そういえば，手塚治虫の漫画「鉄腕アトム」の主人公アトムは，お茶の水博士により育てられ，ここお茶の水小学校で学んだとのこと。妹はウラン，兄弟機がコバルトでした。

さて錦華通りを南に下り，右に皇居を見ながら日比谷通りを南に歩いて行きますと，左手に明治生命館（重要文化財）が見えてきます。中にある静嘉堂文庫美術館には，南宋時代（12～13 世紀），中国・福建省の建窯で作られ日本に伝来した「曜変天目」茶碗（国宝）が収蔵されています。鉄を成分とする漆黒の釉薬に青い光彩が妖しく浮かび，その青はコバルトなどの重金属成分によるものでなく，表面の凸凹による構造色由来とされていますが，その製法も含めた謎の解明を目指す研究の進展が本当に楽しみです。

馬場先門の交差点で左に曲がると，目的地の東京駅八重洲南口に到着です。ここ鍛冶橋門内には江戸時代，津山藩（現岡山県北部）上屋敷があって，現在の東京駅の南側大部分を占める大きな屋敷でした。この津山藩の江戸詰め藩医を務めたのが蘭学者の宇田川榕菴（うだがわようあん）でした。榕菴は日本で初めて化学という学問を体系的に紹介，「舎密開宗（せいみかいそう）」を著し，今日私たちが用いている多くの化学用語（元素，酸素，水素，金属，酸化，還元，圧力，温度，結晶，分析，試薬等）を編み出しました。日本化学会が認定する化学遺産の第 1 号や 29 号はその著作や関連物です。ちなみに日本化学会の前身「化学会」は 1878 年世界で 6 番目に発足，初代会長の久原躬弦（くはらみつる）も津山藩医の家系でした。今年もまた学びながら元気に散歩をしていきたいと思っております。

（和田宏明）

カラー写真ご提供のお願い

化工誌編集委員会

本誌の目次や編集者の独り言下に掲載するカラー写真を広く会員の皆様からのご投稿をお願いしています。ご投稿いただいた写真は編集委員会で適宜選択して使わせていただければと考えています。ご投稿の際にはごく簡単な説明をつけていただき，電子ファイルの場合には高解像度のもの（300DPI 以上）をお送り下さい。

以下のような写真のご提供をお待ちしています。

1. 季節感のあふれた風景・草花・野鳥・動物の写真など
2. 化学に関する写真―カラフルな物質，化学模型，電顕写真，実験機器，化学プラントなど

送付・問合先：101-8307 東京都千代田区神田駿河台 1-5
日本化学会　学術情報部　「化学と工業」誌担当
FAX（03）3292-6319　E-mail: kakoshi@chemistry.or.jp

ソシンロウバイ（素芯蠟梅）　務台　潔